



訓  
勸

和田順吉譯

柳田文庫  
文庫11  
A1462



010190520060

文庫11

A 1462

蒙訓  
勸懲雜話

和田順吉譯

蒙訓  
勸懲雜話

凡例

一此書ハ佛國ドラバルム氏ノ原選ニシテ勉メテ勸善懲  
 惡ヲ旨トシ專ヲ幼童脩身ノ階梯トナシ且初學ノ讀本  
 トスル者ナリ其刊行ハ千八百七十二年ニ係レリ

一里數ハ總テ之ヲ本邦ノ制ニ譯シ三十六町ヲ以テ一里  
 トス貨幣ハ原文ニ各種ノ名目ヲ用井タレハ一々之ヲ  
 譯セズ唯原語ヲ記シテ本邦適當ノ量ヲ註ス其前後同  
 名ノ者ノ如キハ初ニ註シテ後ニ省ケリ

一人名ハ右傍ニ單柱ヲ附シ地名ハ雙線ヲ施ス原音ヲ記

凡例

48-8706

ジテ其義ヲ註スル者ハ未ダ譯字ノ妥當ナル者ヲ得ザ  
ルガ故ナリ

明治八年一月

和田順吉識

和田泉文庫

訓蒙  
勸懲雜話

目錄

第一章	真神
第二章	太陽
第三章	植物
第四章	鳥
第五章	世界
第六章	真神 <small>みゝ見へざるものゝし</small>
第七章	寺院
第八章	禮拜

第九章	眞神ハ善人を佑くる事
第十章	良心
第十一章	後悔
第十二章	貧人ルウ井
第十三章	父母
第十四章	父
第十五章	母
第十六章	女子ルウ井ズ
第十七章	士官ジャツク
第十八章	病母

第十九章	兄弟の愛
第二十章	兄弟三人
第二十一章	前章の續
第二十二章	前章の終
第二十三章	近隣を愛する事
第二十四章	仁惠
第二十五章	孤子
第二十六章	ジュリアン
第二十七章	旅客
第二十八章	諸人の必要なる人

第二十九章	善牧師
第三十章	施濟姑娘
第三十一章	報讎
第三十二章	不善の富者
第三十三章	自愛して他を愛せざる事
第三十四章	家内
第三十五章	老
第三十六章	從僕
第三十七章	朋友
第三十八章	恩

第三十九章	老たるミシユール
第四十章	傲慢
第四十一章	各種の職
第四十二章	裁判
第四十三章	罪人
第四十四章	獄
第四十五章	善良方正の人
第四十六章	三萬フラン
第四十七章	前章の續
第四十八章	奇託を受くる事

第四十九章	欺く人
第五十章	正しき事
第五十一章	前章の續
第五十二章	職業
第五十三章	賢者
第五十四章	牧人
第五十五章	耕夫
第五十六章	兵卒
第五十七章	商人
第五十八章	前章の續

第五十九章	工人
第六十章	營業
第六十一章	魔を使ふといふ事
第六十二章	節儉と時刻を惜むとの事
第六十三章	富貧
第六十四章	前章の續
第六十五章	眞の富者
第六十六章	ナボッツの葡萄園
第六十七章	前途の目的
第六十八章	善人の葬儀

第六十九章 悪人の死

目錄畢

訓勸懲雜話

第一章 真神

和田順吉 譯

石橋好一 訂

真神ハ天地宇宙間の萬物を造る者にして大ハ天上の太陽より小ハ草底の昆蟲に至るまで凡そ人の目と觸るる物と觸るざる物との論を皆此神の造るにあらざるハ余太陽の昇るを見るに其形盛大として光り輝き多くの光彩を放てり又暗夜に星辰の布き列るる天を見れば實に砂粒の海岸にあり如く甚だ數多あり又風

の起ると暴風雨の至るとを聞き時としてて雷聲の余が  
耳底に響くことあり

余四序の循環を見るに草木春を以て地に萌芽し夏の温  
熱を得て舒長蕃茂し後み花を開き實を結ぶ秋に至りて  
熟せば人之を收めて冬日の間長く穀倉に充て貯蓄とい  
汝著意して見よ彼の太陽と星辰と地の豊饒なると草木  
の野に生じて花を開き實を結ぶと皆盡く真神の力に因  
りて創造し又盡く真神の力に因りて保存するあり嗚呼  
我真神其妙力の廣大にして事繁の善良あること實に敬  
畏せざんばあるべからず

我真神の標せし位置を見るに山岳は高く平地は低く溪  
谷の間は小川を流せしめ諸山より大河を下らしめ且雨  
降り露滴りて土地を潤澤ならしむるも皆我真神の爲に  
所あり

人類及び諸動物の爲めは草木果蔬を生育して飢寒の禦  
とらし飢を養ふ麪包渴を止むる葡萄酒も亦もと地より  
生産して皆我真神の爲に所あり

第二章 太陽

童子等余に從ひて野の中或は山の上に至り首を昂げて  
天の盛大なるを觀よ



太陽ハ東の方ニ現きて火の雲ニ包まると如く漸々ニ  
昇りて土地を暖め且豊饒ニするあり  
太陽の廣大なる地を過ぐるを觀よ其進むニ變ること多  
く常ニ齊しく常ニ同じくして終ニ暮雲の端ニ傾き隱  
るあり

夜間余輩の太陽を見るときを得ざる時も其光輝ハ會て  
消ゆることなし余輩ニ其光輝を見ざるも他國の人民  
ハ其光輝を見るあり是レ其光輝の絶ゆることなく決し  
て消えざる故あり奇なるか否神なるら否真神通力の  
事業驚くべく貴ぶべく實ニ得て知るべからざるあり

不學無術の人あり太陽及び萬物を生育する光輝と上地  
を豊饒ニする温熱とを知り太陽を真神として造物の主  
なりと思ひ首を俯し膝を屈めて之を禮拜然れども太  
陽ハもと造りしものよて即ち真神の造る所あり  
真神ニ若し太陽なくんば宇宙晦冥をらんと思ひ太陽を  
創造して之ニ出沒すべき地を示し其進行すべき時間を  
算へて其時と分時とを定めたり故ニ世界創造の後數百  
年を過ぎても太陽ハ真神の定法ニ從ひて其現るる時間  
を限り正しく時と分時とに適合して曾て誤ることなく  
童子等太陽ハ汝ハ真神の妙力の盛大なることを誨ふる

物なり

第三章 植物

汝ハ小樹の生長と其枝葉と花とを見たり汝何ぞ善く之を考へざるや

汝ハ其一枝を折り其一花を摘として玩物とを亦何ぞ善く之を考へざるや

童子等始く汝の意を下して植物ニ感心をべし是を真神の事業の一奇を見らば足るあり

寒氣已ま去り暖風始めて地ふ吹く時葉以て包み花を含めたる嫩芽の自肥ゆるを見るべし

此小き嫩芽ハ甚柔頼にして愛まべし真神之を殻中ニ包藏せしむ

蕾の開くとき彩色ある花瓣を見ハし花底ニ天然緻密なる鬚心を隠ししを果物ハ實ニ之より出るなり

花ハ樹木の裝飾とのに見ゆれども其實ハ鬚心の弱きや爲めふ之を蓋ふ用をなはなり

花の蓓蕾鬚心等を真神の愛護するに切なること恰も慈母の赤子を保んざるや如し赤子始めて生るれば寒氣と猛烈なる空氣とを禦がんが爲めに之を温暖なる襦袢の内ニ包みて保護し真神の花ニ於けるも一ニ斯の如し

第四章 鳥

一隻の鳥あり叢樹の地より來りて巢を作どり此鳥甚小弱  
よして枝より枝へ飛び遷るよ一葉の陰に隠れて見えず  
此鳥ハ草芽及び白楊花の織毛と些少なる羊毫とを拾ひ  
集め又之を樹苔と共に編み合せて一の巢を作り陰密な  
る小枝の上よりあり

雌鳥此巢中より四五又ハ五六の卵を生む其卵を野薔薇の  
實よりも小くして雄鳥の羽色の如き斑點あり

此微小なる雌鳥ハ何事も堪へ忍ぶや二十日の間此巢中  
より止まり動かさずして其翼下より卵を温む時として小穀粒

を食ひ一滴水を飲まんが爲め暫時も巢を離るるとも  
速に歸り就くなり

奇なるかな卵ハ母の温熱にて日ごと殼中より形を成し自其  
嘴にて殼を破り赤裸にして少許の柔軟なる毳毛を被せ  
る雛となりて其中より出るを見るなり

此小弱なる雛を養ふ者ハ誰ぞ其父と母とが遠く野より飛  
び往きて穀粒を拾ひ歸り雛の嘴を開くを見て之を哺を  
時至りて生長し羽翼已に成りて其全體を蓋へは獨飛び  
て食を尋ね或ハ平地に下りて遊び樂むことを得るなり  
童子等汝ハ鳥の苔と羊毫とを以て巢を作るを見雌の翼

下之卵を温むるを見雛の卵殻を破りて出るを見其父母  
の其雛を食を哺むるを見ば皆是と眞神の所爲なりと考  
ふべし  
斯の如き事を成し得るハ唯眞神のまゝにして縦令學問才  
智を誇る人も地を鑿り石を積む巧力ある者も此一隻の  
小鳥だも造り得ること能はざるなり

第五章 世界

世界ハ宏大にして限界なきものなり

汝が住む家の周圍なる庭園と如何と大なりとも是と都  
街又ハ村落の一小隅なり

汝が眼を渺茫無邊に見え汝が耳は遠く端より端より寺鐘  
の聞ゆる程廣大なる都街村落も亦是と國中の一小隅な  
り

我佛蘭西ハ余輩の廣大にして且宏麗ありとせる國なれ  
ども亦是と地球上の一小隅に過ぎざり

汝等畫工の景色を描くが如き地球の表を記載せる地圖  
を見せや此圖表は我佛蘭西國と其國の如何なる地位と  
あるとを示さん其小きこと恰も橙子の皮面なる一の小  
き凸凹の如し

然らば地球の宏大あること實と言ふべし其周圍一

萬零百九十三里ありて上之數多の高山及び大海あり其  
至廣至大なること豈驚くべきとあらざや  
然れども地球も亦唯世界の一小部なり  
太陽を見よ地を距ること三千八百九十二萬餘里なり諸  
の恒星を見よ太陽より遠きこと十萬倍なり又此恒星を  
超えて遠きこと十萬倍なる他の恒星あり  
天ハ限界なく實に茫茫たる太虚あり  
天ニ散布せる恒星ハ悉く皆太陽にて余輩の眼ニハ唯輝  
きたる小點の如く見ゆ其距離の遠きと實に驚くべし  
此太陽ハ總て余輩の目の達せざる他の世界ニ輝き其世

界を超えて又他の世界あり

嗚呼眞神の事業の盛大なること至妙至奇總て人目の見  
ること能くぞ人心の了むること能はざる所にして其神  
異なること實に測知すべからざ

### 第六章

眞神ニハ見えざるものあり

人ハ總て眞神の目前ニありて何事も眞神ニ隠さずと能  
はば眞神の視察ハ普く善惡人の上ニあり  
眞神ハ人の心中を度り人の笑談を聞く故に余輩の思慮  
する所ハ何事しても眞神の知覺せざる事なし  
惡をなす者ハ神罰を免るゝこと能はば眞神ハよく惡人

の心を知り亦よく悪人の言を聞く故なり

嗚呼我真神地として在さざるはちく所として臨まざる  
ハちし余若し天上に昇らば真神其所に在し深淵に下ら  
ば亦真神其所に在きを見ん人或は謂ふ冥晦の時多くハ  
物の余を翳ふととあらん此時或は不善を去るべしと是  
を大に然らば真神ハ晝夜となく光明として照臨し給ふ  
あり

人あり不善を去し真神の知らんを恐きて之を己か心底  
に匿し或は冥晦の中事事を去して誰れも余を見るもの  
を誰れも余が爲し事を知るものなしと思ふハ譬へ

は猶ほ陶器の陶匠を輕蔑して余を作りしハ汝にあらん  
と云ひ又器物の其工匠に向ひて汝を余を知らんを云ふ  
か如く豈に愚ならんや  
汝に耳を與へし人ハ汝が言を聞かざることを得ん汝に  
目を與へし人ハ汝が行を見ざることを得ん汝何ぞ之を  
思はざるや

第七章 寺院

祭日の朝天色清明として葉面花上の曉露猶未だ晴かざ  
る頃レヤールと云ふ人其父に従ひて村の寺に詣てんと  
て出行き遙く林樹と數戸の人家とを眺むれば其間遠く

寺の鐘樓の高く天を聳ちるを見たり

寺樓の鐘聲を聞き漸く近づきて之を見よ其里人の美衣盛飾して祭壇の下に赴く者途に絡繹たり幼男稚女ハ皆書籍を手し微笑して進み貴家の老人の蒼顔鶴髪なるが杖に扶けらるゝあり母ハ各童兒を携へ童兒ハ母の側を遊嬉して路傍の花を探り戯れ走るあり

レヤールハ其父と共に寺中に入りて大に靜肅せり諸人も亦其處に群集雜坐し既にして各神前に跪きたり

此時頌歌の聲ありて衆人身を慎み世界の萬物を創造し萬物の主宰たる眞神を禮拜す

レヤールハ父母の康福を祈念し禮拜經中なる眞神の譽との條を讀誦し少時にして禮拜終りて各徐々と退散せり

レヤールハ父と共に退散せしが幸福多くして天を見野を見又四序の代謝と草木の榮枯とを見て眞神の巧業の至大なることを驚感し又衆を愛し人を親しみ善をよし惡を戒めて善良有徳なれば必大に悦びあるべきことを感じ思へり

### 第八章 禮拜

よく眞神を禮拜すべし是れ眞神ハ汝を有徳に導くがた

めなり

賢人の朝より其心を真神に捧げて其身を神前に置き真神に己が意思を隠はんと欲し

欲せば人汝に與へん求めば汝之を得ん叩かば人汝に聞さんと真神の汝が所望を遂げ得しめんこと斯の如く恭敬を盡して禮拜せよば其至誠真神を感格せしめんと必せり

汝真神を禮拜するも多言を用ゐることあかき多言は思して何の用をなさん真神は汝が神願せざる前已に汝が望みの所要あることを知りて其の如く云ふべし我眞

神在天の靈誠は至妙至聖にして瀆し近づくべきとあらざるも敢て誠信を尽し謹みて衷情を訴ふ今より後世事如何と轉遷せよとも宇宙如何と變動せよとも其意は天のみ等しく余輩をして日く衣食を窮せしむることあく又我が人の無禮を宥恕せよ如く真神も亦余輩の無禮を寛恕し給ひ余輩をして惡しき事と斃ししむることあく且余輩の災害を救ひ給へと

真神を禮拜せよとも窮民を周恤せよとも其功財寶を積むより貴し

汝若し惡事をなせば真神を尊拜せよとも益あるべし眞



神ハ實ニ汝を嫌い避け給はん

汝ハ汝ガ心を正しくして惡念を消し不徳を避け勉めて善をまじ正直を常とし飢寒の者を周恤し孤子寡婦を保存せし如此して眞神を尊拜せば眞神と對して耻るとあかるべし

第九章

眞神ハ善人を佑くる事

惡人の幸福を羨むことあられ又其富貴を嫉むことあられ惡人の野草の如く野花の如し縦令一度ハ繁榮せども終よハ枯落を免かれざるはあり  
望みを眞神に掛けて勉め善をなせば土地を有ちて世

の富豪とらることあるべし

余輩の幸福を願ふもの總て之を眞神に依頼し謹みて神前ニ祈念せば其願ふ所の事を成さしめ給ふべし

惡人の志を得ることありとも長く世に存せざるべし其居所速に湮滅して尋ねとも之を見ざるに至るべし

心清淨ある人の其身安全を得べし

惡人の善人に向ひ怒りて刃を抜き兵を構へ小弱を凌ぎ無罪戕劫さんと欲はとも其刃の知りて己が身に當り其兵ハ己が手中に折せん徳ハ小なりとも惡人の財を有するよりも甚貴かるべし眞神ハ惡人を退け善人を見て之

を佑くまひなり

余既に若大として世を閱むること久しけれども未だ曾て善人の廢てらるること見ぬ其子の世に惡まることを聞らば

世間之眞神を信奉せざる人あり余嘗て其人の一度安逸尊榮なることを見たり恰も山之セードル松の一種長茂せるが如くなりしが少時を過ぐるのよて其人と居と今の既に滅没して得て尋ねがたし嗚呼哀哉

眞神ハ正人ニ安全を授け且之を佑けて其補翼となるべし是れ正人の其望みを眞神ニ依頼するが故なり

第十章 良心

心ハ惡を惡み善を好むものなり故に善をなし惡を去るを養心の要とす

何を善と云ひ何を惡と云ふ童子等善惡を判決するハ其身あり故に自善惡を審知して之を判決せんことを務むべし

惡をなすと人ハ其心紛擾して羞耻多く人を見て赧然たり亦多く昭々の地明々の時を避けて竟に其身を隠し至る是れ其行の理不悖り義に反して自其事の愧づべきを知るに因りてあり

善をなすと人の其心常に安寧として人と對して慚る色  
あし是れ其行の理を循ひ自心の明白として其善道を知  
るに因るなり

各人一の感覺あり即ち前々示すが如く事の善惡を判知  
する事にて此感覺を良心と云ふなり

悪人の心へ人の譽る時に至りて自愧ること多し是れ其  
心の其人を罰するなり善人の心へ人の之を毀るとも自  
一點の愧づべきことなきを知る是れ其心の人を恕する  
なり

良心に即ち眞神の聲ふて余輩をして事理を了解せしむ

る所以のものなり

第十一章 後悔

悪人の喜ぶ誠信することあかれ口を微笑むと見ゆると  
きは其心の毒あり

一種傷むべき人あり専ら詐偽誣罔を以て其身を富貴と  
し廣廈細氈を居り錦衣玉食して甚華美を極む汝等之を  
見て其人の眞幸福なりと思ふや恐らくハ然らざるべし  
其人ハ自此富貴の惡業より成るを知るがや絶え  
ざる囚人の牢獄に拘繋せられて日々其鎖鑰の響き門栓  
の音を聞くが如く心は苦しく思ふなり然らば恰も獄中

よおきて命送る者と同じからん  
或る人嘗て真神と對して罪科を犯ししが他人ハ之を知  
る者ふし然るよ此人常々他人と接遇する毎々其罪案を  
讀まるとが如く思へり一日此人慘酷と未だ策を離さざ  
る雛鳥を殺したり傍人之を見て責めて云く汝ハ何故と  
斯る殘忍なることをするやと其人驚き恍惚として答へ  
て云く汝ハ今聞かざや此鳥我を吾が親を殺したりと云  
へりと既として始めて悔悟し自條理の亂ししことを知  
り其後恐懼戒慎して改心せり  
後悔ハ犯罪の最恐るべき第一の天罰として此罪ハ決し

て免るゝこととすし

汝等人と逢ふことを避くとも己が目とて已を見ざるこ  
と能ハざらん後悔ハ罪を謝する中よて甚恐るべきもの  
なり是れ心の病ハ體の病より甚苦しきと同じ理なり

第十二章 貧人ルウ井

某の村の卑小なる茅舎に住居せるルウ井と云人あり此  
人甚貧しるどども耕耘を業として四人の小兒を養へり  
朝ハ日出より田と出て身屈曲け汗を流して耕作をなし  
夕ハ太陽の地平線と隱るゝと至り鋤を荷ひて家と歸り  
四人の小兒を抱きて其膝の上と居らして小歌を謡ひて

游戲せしめ其後共々粗製の麩包を食ひ其味ハ殊々淡薄  
かゞども其人善心かゞは之を美味とせり

此四人の小兒を養ふハ極めて艱苦なり其故ハ此小兒ハ  
己が爲めと父の稼ぎたる衣食を何とも思わざばなり  
然れどもルウ井ハ之を憂へど其心満足して常々樂しき  
容子なり

ルウ井の睡と就く時ハ實と正人の眞神の兩腕中と安眠  
するが如く曾て驚動することなく

祭日ハルウ井ハ其妻と兒とを携へ寺院と詣て眞神  
を拜禮し歸途ハ大樹の蔭と坐して其兒の草野と游戲

するを見て喜へり

ルウ井ハ斯く恬然として富貴貧賤の爲め其心を動さ  
ず憂苦もかく亦明日の慮もかく泰然として其生涯を過  
したり

ルウ井の眞神を拜する語の中と我眞神よ絶えど我身を  
して健康無病ならしめ給へ是れ余が兩腕ハ即ち余が兒  
子の麩包をばなりと云へりルウ井の眞神と祈るハ惟  
此事のみとして其身の富貴榮華ハ終之を願はざり  
なり

ルウ井ハ父も亦貧賤なり其身ハ至極貧し然れども其心

ハ甚優ふる人にて其遺骸ハ或る富人の傍ふる墓地ニ葬  
り此富人ハルウ井の父ニ反し其身ハ富ニたゞども憂  
苦心勞して生涯を送りし人なり故ニルウ井ハ好みて其  
父の事を語りて樂めり  
ルウ井ハ金銀を以て近隣の人と交を結ぶことを欲せど  
其身貧しく其囊中空しければ其身力を勞し其職事を勤  
むるを以て交りし故大ニ衆人ニ敬愛せられたり又常と  
自謂ふ滿囊の金を懐ふせんよりハ郷曲の歡心を得むと  
ス甚樂しげと

ルウ井ハ貧賤なるとも其行事斯の如く汝等汝が村中

如何なる富貴の人ありとも此ルウ井より幸福ある人あ  
りと思ふとあかし

ルウ井ハ眞の幸福の人なり其故ハ絶えて他人の誹謗を  
受ず也善良有徳として且善心を持てばあり

善心ハ貧人の良友あまは決して貧人を見捨てることあし

### 第十三章 父母

父母をして長く此世ニ性命を保ちしめんと敬愛せよし  
童子等何事も父母の意ニ承順して事物の自然ニ従ふ如  
くまへし

父ハ汝を造りし者あまは父の言ハ聽従せよ又汝ハ母

の胎内にありし時母の辛替をありしこと我思ふべし父  
母を敬はざる者ハ長く此世に存しがとく父母を敬ふ者  
ハ其子の代に至りて安樂の日あらん  
汝等諸事言行に就き汝が父母を敬親をへし父母の徳に  
汝に及ぼして常に汝が身は止まればあり  
父母善を積みば子孫家を固くし父母善を積まざれば子  
孫家を覆をへし  
父母老ゆれば汝よく之を扶くべし汝が幼き時父母の汝  
を扶けしか如くをへし  
若し父母よく病むら或ハ老耄せる時ハ能く之を看護を

べし汝が身ハ父母に賢れりとも敢て父母を輕蔑するこ  
とありれ其故ハ汝が父母のためをせし事ハ父母之を忘  
れぬ縦令汝父母のためハ不幸を受くとも後却りて幸福  
を受くる日あらん

第十四章 父

予世の人の父たる者の其兒子に於けぬを見るは偏ふ之  
がためハ憂苦勤勞して之を扶養し其業を勵みて老い且  
衰ふるに至る者あり  
其父の云く我兒の幸福あらんことを望む然らば余亦  
幸福をらんと

父ハ其兒をして聰明英才をたらしめんと欲して之を教育  
し一科の職業學を研究せしむ是れ他日其職業を以て生  
活し衣食之不足をからしめんとことを願ふなり父の現在  
將來ともく總て其兒のためを思ふこと此の如し  
父ハ總て己が物を其兒は分子を故と僅に一箇の麩包あ  
りとも必其兒と與ふ父の子を慈愛すること斯の如し嗚  
呼子として其父を愛せざるべけんや又其父を敬せざる  
べけんや  
父猶強壯として余を保護せば固より之を敬愛すべし已  
に老いて華髮頭は滿つる時余已に強壯ならば亦益之を

敬愛すべし父子の親ハ之を樹は樹は隙ふどは幹と小枝との  
如し幹ハ其小枝に樹液と養液と生命とを與ふるものを  
り故に其幹を傷く者ハ小枝を害し小枝を傷く者ハ其幹  
を害するなり思ハざるべけんや

汝等父が子のためは心を盡し事汝知らんと欲すや茲に  
憐むべき一貧人の話あり此人四人の小兒を養ひし一  
家貧苦に逼りて其兒子を食はしむべき麩包なく別々  
子に養ふべき手段もなげせば己が生血を賣りて食物以  
て買ひ與へたり其故ハ此近隣の學校に醫術を學ぶ諸生あり  
其脩業のためは往きて刺絡せしむる者ありは其賃料



を興ふと云ふ此人一日此校に往き其兩腕を伸して兩度  
刺絡を受け其賃料を得て家へ歸り麩包を買ひ其兒子と  
與へたり其麩包は即ち己が生血を以て買ひ求めたるも  
のに此人は己が昔況の中斯くなして其兒子の飢餓を  
救ひたるを幸福とせり父の子を愛せむること誠ふ斯の如  
し故に人として其父を敬愛せざるは大耻あらざや又  
其父の不幸なるを捨て顧みざる者ハ其身も亦終に不幸  
と落ちて慚愧の中苦死をべし

第十五章

母

母ハ九個月の間其子を胎内に持ちて辛勞憂苦し子の世

に生ふるに及び又其兒のためと劬勞憔悴を

汝等赤子汝見よ裸體小弱にして唯叫び泣くのみなり之  
を養ふ者ハ誰ぞ即ち其母にして之を兩腕の中抱き之  
を其胸に當てて其乳を哺を兒若し眠る時ハ母其傍に  
あり兒若し病む時ハ母之を看護を故に母の心ハ其兒の  
ためとハ慈愛の寶庫なり  
童子等汝ハ汝が母の夜も長く起きたるを見ぞや全家皆  
睡し就きし時獨り汝が母の燈下で紡績裁縫して曾て  
止まらば汝が母の斯く勉強して其身の休息を忘るる心皆  
其兒のためなり

善き母ハ家の内助なれば汝が母を愛し汝が母を敬して  
之を憂苦せしむることなく其老ゆるよ及びてハよく其  
老を扶け養ふべし

アンドレーハ善良なる兒なりしが其父を喪ひ獨り母と  
居りし時嘗て云ふ今ハ方りて母の助けとあらん者ハ獨  
り余のこかりと是より勉めて其業を管み賃料を得る時  
ハ喜び歸りて皆之を母ニ供し他人の遊樂宴會ニ赴く時  
もアンドレーハ其母の傍ニ侍りて之ハ史傳中の故事を  
語り種々の雜話をあして其心を慰藉し時ハ母の左右  
ニ扶持して村中ニ徘徊散歩せり人々之を見て皆アンド

レーハ孝順良善なる兒なりと云ひ之を愛敬せざる者を

### 第十六章

女子ルウ井ズ

ルウ井ズ女ハ温厚なる生育せられたるは善良にして且才  
智あり一生幸福安樂の兆著れしが憐むべし二十歳の時  
ニ至り通常盛粧鮮服を愛し絲竹宴樂を好む年齢あるに  
愍然たる不幸ニ遭遇し其父老衰の餘大ニ憂勞愁苦する  
ことありて終ニ盲目となれり

是よりルウ井ズハ凡百の事を棄て遊樂を斷ち宴會を辭  
して盲父を扶持し已ニ其導者と方りて其側を離さず勉

めて其才智と談笑とを以て常と之を慰安せり時ありて  
其父行歩せんと欲まじば余を杖とせよと云ひて其側  
傍ひ左扶右持して庭園を徘徊せしめ或は野邊を逍遙せ  
しめたり

盲人の見るとも能はざる物ハ總てルウ井ズ之を語りて  
其父と知らしめ此所と田野あり豊饒ある收穫あるべし  
彼所と花開く小麥あり又穂と出づる燕麥ありと是と因  
りて此憐むべき盲父ハ盡く其物を實見せる思をふせり  
ルウ井ズハ前は好みて宴會游樂を爲しよより其筵と  
伴えんとて屢女伴の誘ひ來る者ありとも答へて云ふ予

若し出て遊ばし誰か我父を導き扶げんと遂と之を謝し  
て去らしめ再び父の側と坐し謠ひながら紡車を轉じ絲  
を紡ぎて止めず斯く歲月を送る事他人とありてハ甚憐  
むべく見ゆどもルウ井ズハ憂色なく只父の意と從ひ  
父の志を和らぐるを以て歡喜とし其後父の死去せし時  
大に啼泣して悲哀殊と深かりしと云ふ

第十七章 土官ジヤック

ジヤックの父ハ小商人ありしが其業を精勵して見のた  
めと勉強正實の鑒とありたり

ジヤックの父久しく病を罹りしことあり此時買物の價

頗と減じて莫大なる損失をなしたれば今ハ家族の生計も如何と大之を憂苦せしが償錢の時と至り果して之を償ふこと能はば責債の人ハ少くも宥恕せざ官府と訴へ裁判を請ひ汝をして入牢せしめんと恐喝せり其時家族の景況甚感むべく小兒ハ泣き叫び母ハ其兒を抱きて涙と咽び大息して俯し居たり

此時ジャックハ曰く二十二歳あり是まで父と共に業を營みて積り貯へたる錢財ハ皆此零落して消散したれば如何ハせんと思ひしが忽ち自謂へらく余ハ生命ハ即ち父の與へられたるものなれば父のためには生命を惜ま

ざることを道理おれと

其頃國々戦争ありて軍卒を召募せりジャックハ或る富者の子に代り行きて兵隊の中に入らんと約し其身を捧げて金を受け齎して家へ歸り之を机上に置きて父に言ふ我父此金を以て使用し充つべし余ハ今より國王に養はるれば此金を用ゐるやと斯く心を定め父の負債を償ひて家産稍く蓄り復せんとす父ハジャックの其身軍陣に趣かんとすを聞き其心困感悲傷をせどもジャックハ家屬を慰め我身ハ戰陣を好むと云ひて暗く其涙を拭ひ糧囊を背に負ひて出行きたり然れども天道ハ善く福ひ

まゝとてジャックは其後六年の星霜を経て恙なく家へ歸り肩の肩總を垂せ胸の名譽の十字架を附け武勇の功績を表して衣錦の榮をなしたまはば父は其子の無事として功を立てしを悦び人は對して常々其子の名譽を誇り語りしと云ふ

第十八章 病母

ポールとマルグリットと云ふ兄妹あり兄は十歳妹は八歳にて兩人相親愛して其母は事ふること温順なりければ母も之を患愛して欣喜堪へど或る時其母病に懼り床褥に困臥して甚煩悶するゆゑポールを驚き憂ひ水藥

を持ち來りて母は吞ましめマルグリットは音響せざる如く注意して足の先にて静と歩み兩人共に晝夜怠らざり看病せり一日マルグリット、ポールは言ふ母の病は危症なり恐らくは不起に至らん然も之を治し得ん者ハ唯我眞神のみなり今予兄と之を眞神と祈らんと二人俱ふ其房に行き拜跪合掌して祈りて曰く嗚呼我眞神余等の母ハ甚善良なれば母の疾病と其煩悶とを救ひ給へ眞神ハ病を治療する良醫なれば我母を健康ならしめ我母を全快せしめ給ふべしと祈禱終りて母の傍に歸りければ母ハ之を見て微笑し我兒よ我病ハ已ま去りて甚快

く既に病床にありと思はば來き余汝を抱んと云ひ小時ありて起立して兒の房に至り幾許もなく平愈し弟れば兩兒ハ喜び堪へず母を抱きて其側を離れず且眞神の其祈禱の應驗ありしを拜謝せり

第十九章 兄弟の愛

兄弟ハ同根より出たる數幹の如く同幹より出たる數枝の如く又其氣の連なること恰を十指の如くなれば相和し相愛せざんばある可ららざり  
汝が兄弟ハ同じ母の胎内より出て同じ母の乳を飲み亦同じ父の兩腕の中を抱かれし者なり然るは汝若し兄弟

を親愛せざれば世上は何者を以て親愛すべき者とせざるや

余等兄弟が父母の家よりありし時其幼時の搖籃ハ互に相近からばや其少しく長びるふ及ひてハ一家の内を並び坐せざりや且食卓を同じく列をらばや汝之を思ハ、豈兄弟と親睦せざることを得んや

子の能く其父母を愛する者ハ亦能く其兄弟姉妹を愛する是れ父母の兒を生みて之を愛育するハ溫和慈愛ふしく長幼の別なく皆等しければなり故に若し其兒子且も不和として且仇讎の思をあたは其父の痛心憂慮をすること

幾何ぞや其母の憂苦悲哀をると亦幾何ぞや人の子たる者念茲と及はる能く兄弟姉妹と相友愛せざるべけんや

然らば兄弟ハ甚善良ある親友として殊に温和に相愛すべき者ハ姉妹あり固より他はあらざるべし  
若し我兄弟姉妹の悲哀をる事ある時ハ余獨り安然と喜ぶべき理あらんや故に其要する所ハ余之を助くべく其乏しき物ハ余之を給ふべし縱令余が所有の物ハ何様微少ありとも之を分つべし豈我門を閉ぢて相入をざるべけん又豈我心を隠して相譖らざるべけん

茲は信奉すべき一の古語ありて其誠實あること至れり盡せり即ち協和をれば勢力を成すと云ふ語にて實は數枝集合せば有力者も之を破り得ざらん若し之を分れば一童兒も戲し之を折り得ん汝等宜しく此語を服膺すべし

第二十章 兄弟三人

冬月泣寒の候はあさりて小流ハ已み氷み鎖を垂平地ハ總て雪は蓋て肌木葉盡く脱し野に飛鳥の聲絶え山となく原とあく數里の間隘々たる一色として唯遠樹の處々に現出して白髮老人の子立をるふ似たりと村落の小屋

より縷々たる竈烟の上るとを見るのみより良き村人の  
其冷えたる指を暖めんと爐邊に團坐して窓間より此荒  
涼たる景色を望みり

茲にミシエール及カテリーヌと云ふ貧しき夫婦あり甚  
だ寒氣の烈しきみ困苦せり固より其家ハ頽敗せる故深  
く閉づきども風ハ戸隙窓間より吹き入り爐中の火ハ已  
に消えて再ひ之を焚んとせきども薪木已に盡きたり側  
に幼き三人の兒子あり其性皆温和善良にして相愛以長  
ハ十歳として名をミシエールと云ひ次のシヤールハ八  
歳未のフレデリックハいまだ六歳を越えだ然るに此憫

むべき小兒等ハ其父母の嚴寒を防ぐこと能はざるを見  
て相語りて云く余等林の中を往き落木墜葉を拾ひ得る  
持ち歸り防寒の具とせんと徒歩して出行き途を埋み徑  
を没せる積雪を踏み冒し寒を厭ふがして進み暫時とし  
て已に家も見えざるまで遠き深林の迂路に入り風よて  
折れ散りたる枝葉を拾ひ聚めたり

第二十一章 前章の續

夫の三人の兒子ハ甚遠く行きて枝葉を采拾する間に暮  
よ逼るを覺て其家と還ることの難うらんとを知らり  
此時三人ハ急ぎ其枝束を積み携へて村に歸らんとし路



を取どども道路ハ埋没し雪ハ足ニ粘りて木沓甚重く暫  
時の間ニ皆疲勞を極め最幼弱あるフレデリックハ既ニ  
歩むこと能ハズ

此困苦の極ニ至りて何をか爲べき惟三人のみ深林ニあ  
りて四望をると一點の光明を見ざれば近隣ニ人家あり  
とも知られズ大聲ふて呼び叫べども其聲ハ徒ニ寂寥中  
ニ響き大木の返響ニて四方ニ鳴り渡るのみなり  
| ミンエールハ止むことを得ズ暫くフレデリックを背ニ  
負ひしが其重きニ堪へズして地ニ坐し三人相對して泣  
き悲しみたり

寒氣烈しくして風ハ其面を刺すが如く流るゝ涙ハ頬ニ  
凍り手も足も已ニ凍えて動かざること能はズ三人互ニ押  
合て坐し居り長子ミンエールニ其季弟フレデリック  
の冷え凍えたるを憂ひ之を温めんとて心を盡したまは  
り遂ニ温め得べからざるを見て速ニ己が衣を脱して其  
身を寒風ニ曝し其衣を以て季弟を覆ひ且其次弟の苦楚  
を思ひて悲哀し亦之を勵さんとて種々心を碎きたり

第二十二章 前章の終

此間父母ハ兒子の歸らざるニ痛心し幾度も戸口ニ出で  
極目遠望せられども目ニ遮る者會て無げばフレデリック

クよミシエールよシヤールよと屢々其名を呼べども之  
に應ずる聲もなく惟平野の陰沈するに數犬の吠ゆるを  
聞くのみあり

深夜に至りて父母ハ愈心安からざ其家を出で兒子を尋  
ねんとすれば數人の村民も亦燈火を携へて爲めを尋ね  
んとて出行き竟る此兒子ふ逢ひたり幼兒ハ殆ど凍死せ  
んとしミシエールも如何にもして之を救ふんとて其衣  
を脱して之を覆へども幼兒の回生し難きを見て更ニ幼  
兒の體の上を横臥し身を以て之を蓋ひ温めて風雪を曝  
さざらしめんとす實に憐むべき景況あり

人々此友愛あるを感歎し三兒を抱きて其家ニ歸り大  
薪を焚き火を熾して保護すれば暫くして幼兒回生せり  
人々之を抱きて其父母の兩腕中へ渡せば其喜悅實に謂  
ふべからざ

### 第二十三章

#### 近隣を愛する事

汝等汝が身を愛する如く汝が近隣の人を愛すべし  
人の汝を施して汝欲せざる事ハ汝も亦之を他人に施す  
ことおかれ人の汝を施して汝欲する事ハ汝も亦之を他  
人に施すべし  
汝が讎敵に至るまで汝之を博愛すべし汝を惡む者あら

ば善を以て之は報じ汝を昔しめ汝を誘ふ者あらば之が  
ためは神を拜せべし然らば汝は天に在り眞父の子たる  
は恥ぢざるべし此眞父は善人悪人の上は太陽を輝かし  
め正人邪人の上は雨露を降らしむる者あり  
復讐をなすことなかれ亦汝が受けとる辱を回想するこ  
となかれ

人の過失は汝之を宥恕せべし是れ汝が過失は人の宥恕  
せんが爲めあり  
汝人の對して怨心を含む時ハ眞神の汝を憫まむことを  
願ふとも得べけむや又人の對して復讐の念を懐く時ハ

眞神の汝を宥恕せんことを望むとも得べけむや

人の余を處する如く余も亦他人を處せんと謂ふべから  
ざり又各人の余の對して施す所業に従ひて余も亦之を各  
人の施さんと謂ふべからむ

悪し報せざるは惡を以てせむることなかれ凌辱し報せざるは  
凌辱を以てせむることなかれ只善を以て惡し報ひ善を以  
て惡し勝つことを求むべし

總て余輩の父ハ同一なり如何とせば同一の眞神同一  
の泥土を以て余輩を創造して形を賦し命を與ふ故に余  
輩ハ悉く皆一大親族あり

余輩の運命ハ皆同一なり同じ地球の上ニ住居し同じ地球の物を飲食し等しき生を得亦等しき死をなす故ニ其患苦ハ固より彼我の別なく他人の困苦を見て亦余輩をして涕泣せしむ

第二十四章

仁惠

汝が財貨を施して貧者を斥け遠ざくると云かれ斯の如くせば汝ハ眞神の恵を得て眞神汝を愛憐すべし貧を恤み急を救ふハ凡て汝が所有物ニ従ふべし汝若し多く有せば人ニ與ふるも亦多かるべし汝若し少く有せば人ニ與ふるも亦少かるべし人を救恤するハ只

良心を以てするを善しとし斯の如くせば汝が財寶の必要ある時容易く之を集むることを得べし如何と云れば眞神ハ汝が恩惠の所行を見て汝が後來を思へばかり貧を恤み急を救ふハ眞神ニ貨財を貸すと同じ眞神必其負債を償ふべし

汝不幸の人を見て其鬱胸を清涼せんとして之ニ唯一玻璃盞の水を與ふるとも汝彼を憐む誠心より出でば此一事として人ニ賞譽せらるべし

飢者ニハ汝が麩包を分與すべし寒者ニハ汝が衣服を給施すべし汝若し穀を收穫せば汝が手より落ちたる遺穂

ハ之を顧み拾ふことなく孤兒寡婦等窮人をして之を拾ひ得しむべし是の如くせば眞神ハ汝が諸業ヲ幸福を降せべし

艱難に在る者ハハよく憐れを垂して汝が身の艱難に在るが如くせべし貧者を恵む人ハ其身富貴となり窮人を顧みる者ハ其身も亦次第不幸に至るべし

貧者の悲叫を聞きて感歎せざる者ハ眞に不幸なるなり他日己が悲み叫ぶ事あらん時ハ人亦之を聞きて憫まざるべし

汝他人を恤まば人も亦汝を恤まん汝善く他人を遇せば

人も亦善く汝を遇せん

第二十五章 孤子

貧者マルセルの家ハ一の不幸到りて其婦を喪ひ其身も次で泉下の客と成れり此人ハ一の勇夫なるよりて近隣皆其死を悲傷せり然るに孤子二人あり幼弱にして更に親族をく且百物缺乏して實に憫むべき景況ありマルセルの近傍にロベールと云ふ人あり家ハ富まざれども其兩腕を勞して家業を營み三人の兒子を養ふ一日ロベール其婦を謀りて云く子彼のマルセルの孤兒が傷むべき狀を思ひ此兒の如何に成長せんかと考ふる時ハ

我愁腸實寸斷せんとい子之を我家に取て養育せんと欲せれど家貧しく累多し然れども子之を棄るゝ恐びどと其婦答へて子に家眷を思はざや余等三兒を養ふも曰く甚勞苦かり如何して五兒を養ふことを得んとい云ふ  
ロベール再び云く然らば余等の艱苦ハ猶少ふし余等一片の麪包を食むるに當り其四分の三を食ひて其餘ハ之を孤兒に分ちん斯の如くせば善良なる眞神必其闕を補ふ物を賜はるべく汝原野に多く諸鳥の居るを見よ是を眞神の窮人をして餬口の術を補はしめんが爲めは養ひ置くものなりと

是より出でて二人の孤兒を尋ね其困苦の状を思ひ感涙を流して己が家へ携へ歸り之を養育すること己が子と異ならざるを慈愛して常々我子と呼びたり

ロベールは日々節儉を事とし艱難して困苦の生活をせしが歳月を積みて二孤已に成長し各手業を営みて精勵の工夫となり週日の終り毎に其日課の賃料を得て之を持ち歸りロベールに呈する故に賀しきロベール暴に富有の身となりて眞神の聖徳を拜視するに至り

第二十六章

レユリアン

ミシエルハ葡萄を以て生を營ししが其培養の時に至り

病の懨りて地を掘り日光雨露を受けしむべき業を作さ  
こと能ハズ故に收穫の時に至らば其望も遂失ハんとて  
殊に愁ふもどる其病久しく愈えざれば朝夕焦慮せり其  
隣にジュリアンと云ふ者あり此人自謂へらく他人の爲  
めをせざる者他人も亦已が爲めにせざれ今より二時早  
く起き一時遅く寝給てよく其勞は堪へば余もジュレに  
代りて工業を作さしこと得べしと

是よりジュレに告げざりて朝より夕に至り時として  
ハ月光の下にて其業を勵むるに斯て十二日の末に至り  
ばジュレの葡萄樹ハ好き模様となり其實の暫時の肥

え且増加するを見たりジュレハ病漸く回復し赴き一  
日天氣晴朗なるに因り衰を扶けて其葡萄園を見んと欲  
して出でたり久しく病床に臥して棄置さし故定めて荒  
蕪をらんと思ひしに豈料らん其地ハ清美にしてよく耕  
し其幹ハ芟刈し小援を以て之を支へ葡萄の房ハ蕃茂し  
てあらんとハ

此時ジュレハ始めてジュリアンの所爲をふることを知  
り深く其恩を感じ強くジュリアンの手を握りて約して  
云く以後ハジュリアンに非ざりて誰か誠意を以て相交  
すべきものあらんと懇に其恵を拜謝せばジュリアン

ハ其心満足して之を以て其勞を償ふは足せりとせり

第二十七章 旅客

一日暴風迅雨よて樹木を抜き屋宇を壊らんとせむ時一  
旅客の雨よ濕を泥よ汚を飢寒よ苦めざる者あり或る村中  
第一の人家よ到りて請ひ多るハ我が爲めよ戸を開き慰  
むを垂きて寒を暖むる火と飢を療むる麵包とを賜へと  
然るよ戸主ハ痛く之を退け我戸ハ漂泊人の爲めよ開ら  
ざると云ひて速よ過ぎ去らしむ旅客ハ又他の門を叩きて  
余寒く且飢えたり惠を垂きて爲めよ戸を開けと請ひけ  
る小戸主又答て云く汝ハ我家を旅舎とむをや村の端よ

行け其處よ旅舎あらんと

旅客ハ斯の如く毎戸を叩けども悉く無情として戸を閉  
ぢて入きざり多きは最後よ甚粗鄙なる一の茅屋よ到り  
之を叩くよ此戸主ハ入り進めよとて速よ戸を開き且云  
ふ爐上よ小枝を投じて火を熾ふよ幸よ僅の麵包あり  
見  
り是ハ真神の汝よ惠む所あり正人よ汝ハ甚疲勞よと見  
えたり恐るべき天氣ありば爰よ暴風雨の止むを待てと  
客を延きて爐畔よ坐せしめ乾柴數條を火中よ投せれば  
火炎發揚して旅客ハ大よ寒を凌くとを得たり  
其後主婦ハ旅客の衣を取りて之を乾かし且麩包と牛肉



其父と共に逍遙して野を過ぎ圃人の麥を茹ると耕夫の鋤を以て地を耕すと芻蕘者の枯草を引くと見又村を過ぎて諸人の各其業を勵むを見るに園地の茂りハ倉中ハ穀實を打つ者あり穀室ハ之を篩ふ者あり又其家事を掌る婦の牧場ハ女と呼びて牝牛の乳汁を絞らしむる聲あり

鍛工ハ鉄砧を打ち鉄を竈中ハ燒きて赤くし鋤の刃とふし車の軸とふし鋏又ハ鋸とふし或ハビヲシユ鶴嘴鋤とふし泥匠ハ屋宇を建築し水匠ハ諸材を製し又鑑を以て鉄を磨して鎖鑰を造る工あり

磨粉車を操る者ハ車ハ囊を當て車輪ハ水力ハ因りて旋轉し其聲遠く聞ゆ

エウジエーヌハ之を見て大に感歎して云く嗚呼我真神の妙力人をして各其業を勵ましむ實に人ハ寸陰を愛惜せざんばあるべからざ

父ハ此語を聽き願て云く信ふ然り然れども猶一事汝が未だ思ひ及ばざる者ありエウジエーヌ云く我父よ其事ハ如何父の云く我愛兒よ人若し群を離れて獨居せば甚しき不幸ならんや我輩互に相要し互に相爲る事ありて功を易へ智を通ぜざると能ハざればなり汝よく熟視

せよ予泥匠の我屋宇を建築せよと要せよ予木匠の我  
諸器を造るを要せよや農夫の播種耕藝せよハ豈子を養  
ふ穀を生ぜよとあらざやその之を收穫せよハ又豈子を  
養ふ穀を作るよあらざや又磨粉車を操る者麪包を焼く  
者熟豆か我食料を製せよとあらざらん  
汝が衣服ハ汝が自作ルよあらざ剪毛者羊毛を切り製  
造者之を羅紗と製せよ又紡婦ハ耕夫の樹藝せる麻  
と亞麻とを紡ぎ之を織工に附して麻布を製せしむ若し  
此工人なくんば汝豈麻布を着るとを得んや我愛兒よ汝  
よく考へよ人類ハ悉皆一の大親族にして互に相補助す

るのみあり豈獨り其一身を以て生を養ふに足らんや故  
よ余等ハ他人の爲めよ其業を勵み他人も亦余等が爲め  
よ其業を勉む是故以て人類各其生を遂ることを得るな  
り  
余輩ハ諸人と連結せる者にして皆互よ其業を要し此よ  
よりて生を養ひ死よ喪ずるとを得るなり

## 第二十九章 善牧師

村の禮拜堂の傍に幽邃にして素樸ある一小家あり其傍  
よ小園ありて荆棘の柵を遶らし其内よ諸の菓類と二三  
株の花弁ありて圃とて蔬菜を藝せしむ是れ牧師の居家

りて其窓ハ青色を以て飾り其門戸ハ弓形にして葡萄樹  
の蔓纏綿し其景誠ニ閑静なり

汝等悲哀痛心する事あらば此所ニ往きて神を安じ心を  
慰むる言を聞くべし此言ハ天より出づる箴言にして能  
く人の心情を開明を汝過失ありて後ニ之を悔悟せば  
又此所ニ往きて善き教示を受くべし汝如斯して眞神ニ  
和し諸人ニ交ハレ且其身と心と相和同むる要を知り得  
べし

善牧師ハ性質忠實にして且親切あり故ニ多く他人の事  
を思ひて己が事を思ふ事甚少なく恰も人家の親父の其  
家累を慮むるが如し若し不幸にして悲哀する者あらば  
往きて此牧師を尋ね問ふべし然れども幸福安寧なる者  
ハ此牧師を要せむ

若し病む人ある時ハ牧師往きて其臥榻の側ニ坐し其煩  
悶の際之ニ氣力を授け且其身をして復び健康と爲す  
慈善を爲ると歟得しめんとの談話をあむ

衆人ハ唯現在の情願を述べども牧師ハ身後ニ天上へ  
生るゝ時の情願を語る此情願ハ永世不朽の希望あり  
嗚呼此牧師ハ善良貴重の教職不しとよく其職を盡しよ  
く諸人を愛し且人々相愛する道を教ふる者あり汝之を

敬愛せざんばあるべからず

第三十章 施濟姑娘

其心淳良端正にして深く真神を信奉し人の患を憂ひ人の悲を悲し専ら仁恵を事とする婦人あり自云く衆人ハ皆我親族にして余ハ衆人の姉妹あり故に余の衆人を視ると皆我兄弟姉妹を視るが如くあるは余の之を慮するも亦兄弟姉妹の如くなり

余ハ幼者を保護し之は教科の初歩を授け且之は真神を敬拜せると父母を孝養すべきと教諭す

余が病者を看護するハ其臥床の傍に在りて万事に注意

し身体をしつ強壯ならしむべき飲料を持し之を病者の口に入し又疵傷ある者ハ其疵を巻き其創を裹し不幸ありて死せんとする者ハ之を扶持保養す余が斯の如く他人の爲めを盡し力を尽さん亦惟余が生涯を送ると彼の善ハ小なりとる勉め之をせべいと云ふ語と我旨と爲るのみより敢て世人は稱賛せらざんと我望むにあらざと

姑娘よ汝ハ深く真神を信奉し且仁愛ありて其行事實に感ぜり堪へたれば汝ハ多く衆人の恭敬尊崇を受くべし余此姑娘が貧院の看病人とある我見りて甚粗なる毛

織の長き上衣を着且白布の障面を被るのみ其飾ハ斯の如く素樸ちどぞ其身の端良あると其心の正直あると實り其容飾をしつ花麗あらむ

此姑娘の歩行する或見ると容儀甚謙遜にして己が嘗て看護せし病者と逢へば微笑しつ立談を故り少年の輩も亦此女を見り其恙なき或賀くも敢て憚り隠るゝ意あることあり

此姑娘一日或る貧家に到るゝ一人の病者ありけむば之は藥劑を與へて其快愈を願はしめ此家を去りて後其喜色ある事恰ん善事を爲し時の如し

此姑娘斯の如く善良仁慈あると毎日病床藥爐の間居り呻吟苦痛の聲を聞き垂死病者の側り其生涯を過さんとするハ果して如何なる意思あるや是を他かし其心至誠惻怛にして人を憐む意深くよく近隣を親愛する情より出て即ち幸福を受くべき生なり如何とあむば善を爲し仁を樂む人ハ天必幸福を賜ふが故あり

第三十一章 報讎

或人フレデリックに對して怨を抱く者あり余其人の名を指しとを欲せど其故ハ悪人の姓名ハ之を忘れん事を要さればあり

此人フレデリックは對して凌轡を極めフレデリックの  
所爲を惡しく流言し且之と争鬪を挑み百事仇讎の如く  
せり

フレデリックハ優容して敢て之と校抗せざ常々云く彼  
れ斯の如く余を仇視すとも余をして智識才學以晦まし  
むること能はば正人ハ善く余以知り且余が行事以審ら  
ふせん余今彼より報ゆるに怨を以てせざして徳を以て  
せば幸福何ぞ我身の歸せざらん夫れ人惡を人の施して  
己が身を富貴とせんと欲せとも豈之を得る理あらんや  
と

一日此人の兒路上に顛躓して疵傷せり偶フレデリック  
此途を過き之を見て直に其兒を兩腕の中へ執りて之を  
扶け且云く傷ハしき兒よ汝ハ汝が父の余に於けるが如  
き惡怨を他人より受くる事ありぬと竟に之を其家へ送  
り

他日此人の家の一の災厄到りて其畜へたる獸畜悉く病  
と罹りて斃れんとす此人大に驚歎をせども之を救ふ術  
なくして周章せりフレデリックハ禽獸の諸病を治する  
秘方を知りたきば直に往きて藥を興へ治療して全く平  
愈せり

一日此人馳して峻坂を過くるとき其馬忽ち怒りて横走し將て深淵に陥り岩に當りて其身を粉碎せんとす勢あり此人恐懼して人色あし時フレデリック偶此路を過ぎ其最況を見て恰も電光の射るが如く急ぎ走り生を輕んじて其馬を救ひ遂に此人を救ひし者皆云く善哉フレデリック彼れが其身に禍害をなすを顧みず其危きを見れば徳を以て怨む報へり善哉フレデリック誰か汝を愛せざらん

此人羞耻後悔してフレデリックの家に至り謝して曰くフレデリックよ汝は善人にして余は惡人なり汝今徳を以て余を勝ちしより余實に既往の非を知り汝が大徳を感佩せり今より復汝に禍害をなさざと

### 第三十二章

#### 不善の富者

一富豪あり其家華美を窮む從者數人あり日々往來して事を執り家長は専ら奢侈游宴を事とし其食案を列する田圃の蔬果山海の魚肉皆珍膳滋味にして夕に至れば銀燭高く照し滿室光明として車馳せ馬嘶き其景況實に人目を驚かしむ

此富家の比隣に貧者の一草廬あり此家の壞壁敗籬滿目荒涼として窓に破きたれば閉づるとも隙ありて風を支

へぞ爐中の火已に消燼して飢寒并ひ至れり貧者此愁苦  
の間は隣家の游宴方々聞こして笑語の聲耳に徹す  
此時貧者富人の門に至りて其身の窮苦を訴へ且其殘酒  
餘炙を乞へども家長は其言を聽らざ僕人の命を嚴に  
之を辭せしめ其餘餘は皆其畜犬に投與せり  
然るに此富者の數年を経て偶然に拙き企望を起し其事  
成らばして家を破り産を傾くるに至り彼の金銀を以て  
修飾せる居館も責債人の手落ちたり  
是に至りて此富者始めて患苦窮困を知り蓋し衆人之  
を捨てて顧み親む者なきが故あり

斯くて此富者矮小なる草舎に住其家狹隘にして敗壞  
し窓破れ柱傾きて風日を拵はば如此貧困の身となりて  
始めて既往の非を知ら慙愧後悔し日夜孳々筋骨を勞し  
て其業を營み纔に麩包を得て家族と共に安寧和同ある  
ことを得たり

第三十三章

自愛して他を愛せざる事

汝等自愛と云ふことを知るや  
人あり云く余が幸福は何ぞ他人の事と關らん世間の人  
各其身の計を爲べし余は他人の爲めに分を尽さんとて  
世に出るとあらば故に他人の運命と換へて我身体を昔



しめば亦他人の爲めに物を費さんとして世に來るにあら  
ば故に我身の爲めに身体を勞し我身の爲めに志意を盡  
して我生を謀り我事を爲ん他人も亦能く自己の事を圖  
るべしと

此自愛する人の唯其身のみを思ひ己が事掃除きてハ別  
に思慮を費さばと云ふ其言知るべし其志も亦知るべし  
此等の人の他人の悲愁哀傷を見ても之を捨つ遠ざけて  
其身の困難に至るを避けんと欲

若し他人の災厄に罹り或ハ貧困に至る時も自愛する人  
ハ其家坐して敢て之を憂恤救周せざれば其有る物

を縦合少しありとも之を分與すれば其身に損あり且其  
貯蓄を減ぜんを恐れてあり

此自愛する人の結尾ハ如何と云ふ事を知るべし是を他  
人を親愛せざるが故に他人も亦之を親愛せざるべし

自愛する人の他人を疎遠を他人ハ之を疎遠せざや如何  
自愛する人の父母も亦兄弟姉妹も亦親族朋友も  
あし

自愛する人の他人を皆暴悪として且人の恩を忘る者  
かりと云ひ己が暴悪として人の恩を忘ることを顧みず  
殘忍薄情として己の心を愛する人告ぐ汝ハ人を交り

親む事多く惟一身子然と其生を送る事恰も鴟巢の晝ハ  
巢中よりありて夜間に出て餌を求むるが如し  
汝が家に住まざるを見るに實に彼の醜動物の墻壁孔中に  
其身を藏すが如し  
汝ハ年老いし身衰へて病曰く發せざる時汝が傍に看護養視  
の人多く獨り困苦呻吟して其床頭を憂死せべし

第三十四章 家内

余と共に正しき家族の居住する家へ往きて其家法を見  
るべし父ハ野に出で或ハ家へ居り或ハ庭園を涉り或ハ  
器具を造り或ハ手業をなし或ハ商事を經理し常に華々

として曾て怠ることなし如此其業を営むる惟其一身の  
爲めにあらざ其側なる妻孥のためにして妻孥を此によ  
りて生活を得るなり

妻ハ往來奔走して或ハ竈に火を焚きて食物を調理し或  
ハ紡車を轉じ或ハ針工をなす或ハ其兒を養ふに注意し  
或ハ兒子の衣服を裁縫し或ハ其傍なる諸物を正整して  
清潔ならしむ斯く意を尽せし亦其一身の爲めはあらば  
其夫孀と兒子との幸福を要せんとあり

父母如此あるが故に其兒子も亦隨ひて風流らし長男ハ  
既に父と共に其業を営みて家事を助け長女ハ針線を執

りて母の業を分ち或ハ稗子以其兩腕中ニ抱けり  
小兒の群をあして庭園ニ歩し或ハ田野ニ行くを見よ如  
何ニ幼少ありとも皆其小手にて惡草を抜き又其牧の牝  
牛諸畜の爲めニ其食料の草を採集ス此の如く相和同し  
各其分の力を盡しく其缺を彌縫せり  
長とふく幼とふく各其職分を盡し各其業を勉め公税を  
納れて遁ふく私債を償ひて負ハざるを以て善事とて是  
と各人の勤勞協合して遂ニ一家族の幸福とありと非  
ぢや家族の善良正直あると其和同親睦あるとの著るま  
效あると此の如し故ニ各人惟其一身の爲めニ生をま

んと思ハズ各相補助戮力して生城あるは豈事を誤る理  
あらんや必ズ各人相和合して其生を遂げんことを務む  
べきあり

### 第三十五章 老

耆老ハ淳厚よくて貴重むべき者あり人あり鵝皮鶴髪よ  
して齡ハ七十五六若くハ八十歳を經ん汝此人を見よ此  
人汝が生じし時既に老大として汝が生るるを見又汝が  
父の生るるを見たり此人の汝等が間ニ在るを森林ニ譬  
ふれば一の古樑樹の衆小樹の中ニあるが如し  
此人昔ハ強力雄健ふしく額を昂げ頭を直しく歩行せ

しが今年老い力衰つたり然れどもなほ才富み智多く  
且善良なる教諭あり故に汝此老の許す往け此老必汝と  
往時を語り且其經歷實見せし諸業の効驗を説くべし  
汝此老者の許す往け有徳の耆老ハ恰も古鼎の管て含と  
し飲物の貴き遺味を永く存して失はざるが如し  
有徳の老婦あり予其暮年の安寧あるを見て大に之を恭  
敬す此婦を既正其兒子と家事とを措据する事なく兒子  
を成長して今既よ戸主となりたり然れども老婦となほ  
時ありて其子の處に來り其媳婦と女孫とを教誨訓導せ  
り

老婦ハ常々其房に退居して優游無事なり是れ眞神の此  
婦ハ積年の勞を賞して其終焉の前之に安息の時を與ふ  
るあり  
汝等彼の壽考よして久しく世を闊せし人を見れば必立座  
して之を敬愛尊崇をべし  
耆老の居る所ハ少壯の輩ハ總て謹慎畏敬して其言を  
聴受をべし老者已に耄して其事理の少しく差へるとあ  
りとも敢て之を詰難非笑する事なかり其故ハ少壯輩ハ  
知識淺薄よして才智ハ多く老者の言よあはばあり  
才智の老者が言中よ存するハ恰も蜜の古木幹にあるが

如し

第三十六章 從僕

耶穌經典中、至善なる良誠あり曰く汝ハ汝が從僕哉、遇  
ざるも慈善を以てせよ、是れ汝が主も從僕の主も同じく  
天に在らず、眞神にして眞神の人を待てる、固より貴賤  
の別を爲ざる故なり、夫れ汝と汝が從僕との身ハ同じく  
眞神の造れる物にあらざれば、若し汝が從僕を處するは正直  
ならざれば、眞神憤怒して必汝を罰せん、汝が糾問せらるん  
時何を以て之を謝し何を以て之に答ふへしとせよ、  
是故に人類の眞神の前は悉皆平等なるものとし

る尊卑貴賤の階級なく、故に主人主婦もなく亦從僕從婢  
もなく悉皆同一の泥土片個を以て創造せられたる者な  
り

然らば人類の神前には悉皆平等なるは塵界人民の  
間、貴賤尊卑の差の如き平等ならざることあるは止む  
を得ざる勢、亦神意に適へりとも、雖も之を爲め  
る至重不朽なる神前に向ひて人類皆平等なる事を忘る  
ることからしめ、世に公平ならざる事ありとも、此至重不  
朽なる神前の平等なるは因りて其事皆消滅をべし、故に  
汝が從僕を待てるは善慈と厚情とを以てし、務めて仁愛を

加ふべし又他人の汝に施す所汝が欲する事あらば汝も亦之を從僕に施すべし汝が從僕を處するハ眞神の汝に依頼しよ從僕の身を以て汝に託せるが如くせよ眞神の汝に從僕の身を託すハ不幸にして困苦せしめんとするにあらま汝が闕を補ひ汝が勞を助けしめて汝と彼ととの多くの幸福を與へんことを欲してなり

若し從僕の過失あらん時汝之を寛宥する意なくんば汝が過失あらん時亦誰か汝を寛恕する意あらんや又從僕の過失ハ獨其身の過失にして主家の過失にあらざと思ふか且從僕の過失ハ汝之を赦さざして汝が過失ハ汝自

訓  
勸懲  
雜話

和  
田  
順  
吉  
譯

石  
橋  
好  
一  
訂

第三十七章  
朋友

朋友を人間の最も貴重すべき物にして之を除けば他は畢生の幸福を輔成すべき者なし故に衆と昔樂を共にして已が喜を之を他人に分ち他人の憂を之を已に分つべし如斯して多く金蘭の交友を得ば其喜實と多かるべし汝が悲歎の時と當り朋友來りて汝の勇氣を増し又汝を

其兩腕の間と把りて汝と悲哀を俱とせば汝之が爲めに  
堪へ易らるへし爰と一個の物ありて之を支持せん二  
人なれば軽くして堪へ易く一人なれば其力堪へざらん  
又二枝を合せば軟弱なる一枝の如くに容易く折れざる  
べし人の朋友と相交り親まざんはあつべからざるを其  
理一なり

汝若くハ都街若くハ村落に逍遙して途上汝が朋友に遇  
ハゞ汝が心和悦し微笑して之を迎へん朋友も亦汝が手  
を把りて禮をなし蓋を傾けて語り袂を連ねて歩せば其  
悦豈大ならんや是れ眞の汝が莫逆の友にして彼の汝が

之を赦す權理ありと思ふ

規則と條理とハ同一とて彼我の間と等差あることな  
し故と汝他人の汝を恕せん事を欲せば汝も亦他人を恕  
せざんばあつべからん

早稲田大学図書館

011788023385